

守  
り  
た  
い  
笑  
顔

【登場人物】

小島亜子  
(15)

小島由美  
(45)

白川小百合  
(80)

【守りたい笑顔 概要】

小島亜子（15）の祖母、白川小百合（80）の口ぐせは「命より大切なものなんかない」。自分の息子をバイク事故で。夫を病気で亡くした祖母だったが、気丈に一人で暮らしていた。

しかし、2024年1月1日に起きた能登半島地震によって、祖母の暮らす家は半壊。避難所生活からホテルに入居したが祖母は元氣を取り戻せない。

祖母に元氣を取り戻してもらうため、亜子は祖母の大切な何かを探し当てる。

S E 緊急地震速報

アナウンサーの声「津波警報です。今すぐ逃げて下さい。可能な限り高いところに逃げること！」

亜子 M 「2024年1月1日。午後4時10分頃。石川県能登地方を震源とする大地震が起こった。この時の、アナウンサーの必死の呼びかけを忘れることはない。能登には、ばあちゃんが一人で暮らしている。逃げて助かって。そう願うことしかできなかった」

S E 電話着信音

(電話の声)

小百合 「亜子ちゃん？」

亜子 「ばあちゃん？ ばあちゃんだよね。よかったです。ママ！ ばあちゃんから」

由美「母さん。無事なのね。よかった。ほん  
とによかった」

小百合「心配かけたね。家は傾いちゃったけ  
ど、隣の三田さんが声かけてくれてね。  
一緒に避難したの。一番大切な命が助か  
った。避難所でもみんなよくしてくれる  
し『能登はやさしや土までも』って。そ  
の通りだよ」

SE 玄関ドアの開閉音

由美「ただいま。まだ起きてた？」

亜子「おかえり。どうだった？」

由美「待って待って。悪いけど、お茶淹れて  
くれる？」

SE ケトルの湧く音

お茶を淹れる

亜子「ばあちゃん、ホテルに移れたんでしょ」

由美「うん。快適だよ。あったかいご飯とお風呂あるし。まだ避難所にいる人に申し訳ないって。そればかり」

亜子「私が行きたかった高校に合格したこと  
は？」

由美「もちろん話した。すごく喜んでたよ。  
合格おめでとうって」

亜子「そっか。よかったあ。ばあちゃんには  
笑っててほしいもんね」

由美「そうなんだけど。前より元気が無くな  
ってるってうか」

亜子「えーっ」

由美「空気が抜けたみたいな感じ。一緒に暮  
らす？って聞いてみたけど。珠洲に戻り  
たいとか言うの。困っちゃった」

亜子「命は助かったのに」

由美「元の家に住めないっていう現実味が増  
してきたのかなあ」

亜子M「ママのお兄さん、つまり私の伯父さ

んは高校生の時バイク事故で亡くなった  
そうだ。じいちゃんは5年前に病気で亡  
くなった。一人暮らしだけど、畑仕事も  
して、いつも元気で明るいばあちゃんだ  
った」

（回想）

小百合「亜子、命は大切にしなさいよ。命よ  
り大切なものなんかないんだから」

亜子M「そう言ったのに」

亜子「ばあちゃん、大切なもの持ち出せたか  
な？」

由美「位牌は持って出たらしい。それに、必  
要なものは全部揃えたんだけど」

亜子「他には？」

由美「大好きな焼き物も、地震で壊れたって。  
諦めてたよ」

亜子「うーん。ママ、リュックは？」

由美「リュック？」

亜子「濃い紫色のリュック。あったよね」

由美「ああ、兄さんの？」

亜子「そう。伯父さんの形見だつて教えてくれた。ばあちゃんちに遊びに行くと、いつもそこからお小遣いとかおもちゃとか出してくれた」

由美「そうねえ」

亜子「床の間だ」

由美「床の間？」

亜子「天袋に入れてるの見た事ある。神様が守ってくれるんだつてそう言つて」

由美「いつも床の間はきれいに掃除してたもんね」

亜子「ばあちゃん、ちゃんと教えてくれてたんだよ。大切なものはここにありますがよつて。なんで忘れてたんだろ。とにかく、私、行って来る」

由美「えっ、ちよつと」

亜子M「三月、卒業式を終え、母と珠洲市に向かった。電柱は倒れ、あちこちで崩れ



た家もそのまま。地震から2か月。何も変わっていない」

亜子 M 「ばあちゃんちも、もう住める状態じゃないのがすぐにわかった」

亜子 「けっこう傾いちゃったね」

由美 「地盤も割れてるし、どうしようもないか」

S E ツバメのさえざり

亜子 「ママ、ツバメが巣を作ってる」

由美 「今年もこの家に来てくれたんだ。なんか、泣けてくる（鼻をすする）」

S E 軋んだ玄関をあける

由美 「靴のままでもいいから」

亜子 「うん」

由美「足元、気を付けて」

S E 食器を踏む音

亜子 M 「無残に割れた食器の山」

由美「床柱がある。ここだよ亜子」

亜子「あ、そう、この上の天袋」

由美「開かない。壊しちゃうね」

S E 天袋を壊す

由美「すっごいほこり」

亜子「見える？」

由美「えっと。うん。ある。あつた。兄さんのリュック」

亜子「きつとこの中に」

S E ファスナーを開ける

由美「カセットテープ1本、絵が二枚と、写

真が一枚」

亜子「ママ、これ。やっぱりお宝だよ」

由美「金の延べ棒じゃなかったけどね」

SE ノック

亜子「ばあちゃん」

小百合「亜子。よく来たね。遠くまでありが

とう。もう、会えないかと思った」

由美「なに弱気なこと言ってるの。はい。元

気になるお菓」

小百合「このリュック。えっ？ どうして？」

由美「驚いた？」

小百合「探してくれたの？」

由美「亜子と、天袋から取り出してきたのよ」

小百合「そんな危ないこと」

亜子「神様が守ってくれたよ」

SE ファスナーを開ける

由美「じっくりお話を聞かせて」

亜子「待って。その前に」

SE カセットテープをかける

きらきら星のピアノ演奏

由美「私の初めての発表会」

小百合「由美が、泣きそうになりながら弾い

たんだよ」

由美「はずかしいから、もういい」

亜子「ばあちゃん、これは？」

小百合「これは、由美が小学校の時に描いた

家族の絵。中学生のお兄ちゃんがいるで

しょ。こっちは髪がフサフサのお父さん」

亜子「これも入ってた。私が幼稚園の時描い

た、ばあちゃんの絵だよね」

小百合「そうそう。すごく嬉しかったから」

由美「母さん、この白無垢姿の白黒写真は？」

小百合「まあ」

亜子「すごくきれい」

小百合「当時、お金なくてね。結婚式は出来なかった。貸衣裳で写真だけ残して、もうこれ1枚だけ。お父さんの若い頃だよ」

亜子M「ばあちゃんの皺のある手が、何度も写真をなでた。大切な人の言葉は心に刻み付けよう。生きてる限りその笑顔を守りたいから」

小百合「亜子、見つけてくれてありがとう」

亜子「うん。うん。（泣き声）じいちゃん、かつこいいね」

（終わり）